

## 森羅万象匠塾開催

ものづくりに係るヒト・モノ・コト・ココロを講師に語っていただくJIA三重の伝統企画である「森羅万象匠塾」が、10月22日に津市・三重県総合文化センター特別会議室で13名、ZOOMで11名の出席で開催された。講師には松阪市と多気郡を中心とする“三重県・中南海勢30万人の郷土紙”夕刊三重新聞社の報道部記者・長嶋千聡氏をお招きして行われた。演題は「地域紙の記者がみた『建築家+社会』の関係」。氏は1999年に中部大学建築学科に入学し同時期に吉本興業名古屋支社NSC(養成所)にも入校した変わり種。

### 「ダンボールハウス」を卒論に

講演内容は、自身で出会ったホームレスの住居「ダンボールハウス」というテーマを、大学の五十嵐太郎講師(当時)の指導のもとにまとめた卒業論文「ダンボールハウスのコミュニティについて」にまつわるお話が中心であった。ちなみに当事者たちはダンボールハウスを「コヤ」と呼んでいたという。

卒論の調査のフィールドは、主に名古屋市の久屋大通とその周辺であった。約百人から聞き取りとハウスの調査をしたという。2005年に愛知県で開催された「愛・地球博」に先立つ行政による“まちの浄化作戦”や、その後の“寄生させないまちづくり”で壊滅したダンボールハウスを想えば希少な論文となった。

ダンボールハウスとの出会いは、学生時代に深夜のコンビニでのバイトで弁当など余剰食材を処理するうちに当事者と親しくなって、ダンボールハウスを訪ねた時であった。第一印象は、“意外とちゃんと作っているではない



か”で、住人には建築現場作業経験者が少なからずいることを知る。まさに、建てることと住むことが一致している、セルフビルドであった。

### ダンボールハウスの実相

ダンボールハウスの平面モジュールは、床に使われる輸送用パレットの寸法によるところが大きいことが分かった。ハウスの構成材は、ダンボールやブルーシート、枯れ木、パレットなどの廃材、つまり世の中のゴミが主であることが特色である。卒論ではダンボールハウスを幾つかに類型化して「小屋型」や「テント型」、「小屋+テント型」などに分けられたが、他人と関りを持たない人は独特な形式を成すことにも気付かされた。また、古くなった屋根材と床材に新しい建材がどんどんと積層されてしまう繭のようになる傾向や公園の樹木の枯れ枝による“鳥の巣”形の骨組みもみられたという。お話をうかがっていると、外装材であり内装材でもある薄いブルーシートがC.アレグサンダーの提唱する「厚い壁」のごとく、暑ければ住まい手に軽快に破られ加工され「有孔体」となる様に小気味よさを感じさせられた面もある。

なかにはセルフビルドが苦手な方で多少の経済的余裕のある方に向けて「賃貸ハウス」もみられたそうで、路上の陣取り合戦で得た貴重な「場所」を無闇に他人に渡したくない「家主」の心理もあって成立したとみている。

建築設備の面からは、給排水衛生設備は公園の公衆便所に依存していることが多く、電源はガソリンスタンドから廃品バッテリーをもらい受けてその電気の残量を消費することでまかない、ガスボンベをどこからか調達して使っている例もみられた。こうした報告からは関東大震災後の今和次郎の「バラック」を想

起させるが、災害に起因するのとは違い社会との関係性のうえからは似て非なる様相が読み取れる。

調査者としては、吉本NSCで培ったコミュニケーション能力も役立ったのではないかと。氏の瘦身の体形も存外重要ではなかったか。恩師のように豊かな体形であったなら成果も違ったのではないかと、などとも思われた。

### 記者として

大学卒業後は会社員として勤務した他、東京で“売れないお笑い芸人”なども経験したが、朝日新聞記者から「居場所」に係るダンボールハウスの取材への協力を依頼され、帯同するうちに記者の仕事に興味を持ち現職に至ったという。記者は、上司にせかさされ書く記事の量とスピードでは世の中に評価されにくい。建築を学んだことと共に、ダンボールハウスでの権利として「住む」ことや住むより生きるかどうか、そこで生活し続けること、ハラ決めた人がハウスで身をもって生きる様、生きること・建てること・住まうことが素直に露出した事例と接した体験も活かして、現在は介護施設の連載記事「お部屋拝見」でのしつらえの取材や農機具小屋をテーマにするなど工夫して記者活動をしているという。地域の建築家グループとも交流してイベントに参画したりしているという。

池澤 邦仁 (JIA三重)

池澤アソシエイツ

